

中田達也准教授が研究代表を務めるプロジェクトの 取り組みが山陽新聞朝刊に掲載されました

中田達也准教授が研究代表を務める「市民参加による海洋総合知創出手法構築プロジェクト」での水中遺跡調査について、山陽新聞の取材を受け、12月25日付け朝刊に掲載されました。

山陽新聞 2024年(令和6年)12月25日 水曜日

瀬戸内海の水中遺跡探究

市民調査員帆船ツアー 本紙記者乗船

神戸大やNPO法人・水中考古学研究所(京都市)などは「海洋文化遺産プロジェクト」と題して岡山、香川県など瀬戸内海沿岸12地域で、市民参加の水中遺跡調査を進めている。その一環で11月29日〜12月1日、市民調査員が実際に遺跡を巡りながら瀬戸内海の歴史へ理解を深める帆船ツアーがあり、記者も参加した。(久万真毅)



帆船のデッキから「水ノ子岩」方面を望む市民調査員。専門家による解説もあり、歴史ロマンに思いを寄せた。香川県・小豆島沖(今中雄樹撮影)

船沈没か

中世の備前焼が多数海底から引き上げられた香川県・小豆島沖の「水ノ子岩」や江戸時代の石積み防波堤が残る備前市・大分島など見どころが多いコース。出港後の講義で同研究所の吉崎伸理理事長(備前市出身)は、遣唐使船や朝鮮通信使などを例示しながら「干満に合わせて行き来する潮流を『ベルトコンベヤー』のように生かした海上交通が古くから盛んだった。半面、流れが複雑で事故も多かった」と解説した。

午後5時半ごろ、小豆島の東約6kmにある水ノ子岩に到着。デッキに出ると、

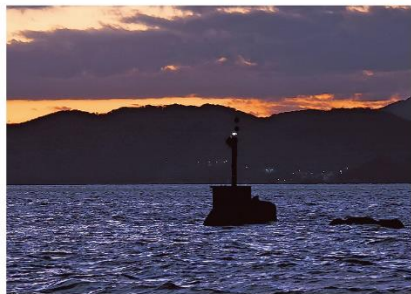
海底に備前焼「水ノ子岩」

交通の歴史 思いはせ

夕暮れ時の薄暗い海面に突き出した岩の上で注意を促す灯標が光っている。1977年、山陽新聞社などが行った学術調査で、この直下水深約40mから室町初期のものと思われる備前焼のすり鉢やつぼ約200点が見つかったという。備前市の片上港から紀州方面に向かっていたとされる運搬船もこの岩礁にぶつかり沈没したのだろうか。想像が動き立てられる。

乱掘懸念

水中遺跡の調査は陸上に比べて遅れているとされる。国や自治体による文化財の登録件数約47万件的うち水中遺跡の数は400件程度。水中ドローン(無人潜水機)などの発達を背景に、「宝探し」を目的にした沈没船や海底遺跡の調査を禁じる国際条約が2009年に発効したが、日本は批准しておらず乱掘も懸念されるといふ。



夕暮れ時、小豆島沖の海面に突き出した水ノ子岩(今中雄樹撮影)

プロジェクト代表の中田達也・神戸大大学院准教授(海洋科学)は「水中文化遺産は、島国・日本にとっては国の成り立ちに関わるアイデンティティーそのものの。保護・保存のためには、その存在をもっと多くの人に正しく理解してもらったことが重要だ」と事業の意義を強調する。

「山陽新聞社提供」